

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 JAPAN mm

百塔六四ヨリ  
百二十五四手



八犬傳九轉  
下伏之上 翠君評



門1曾 4  
號 600  
卷 81

八犬傳九輯下 悅之上 杜評



南總里見八大傳九輯下帙之上松評

附言頼れり或人の同美作名の答徳者之事蹟或  
引まくの高湯感佩すりやうめきのまくもあつて  
予もある所の里見をさうすがやも絶と題さるゝ事無  
ことの如きの定てよりあまうるゝ心ゆてほゝ争  
毛過てゝゝけ附言すゑ急地冰解處伏せり

ハ大士ハ臣女の肖像鬼籍アヘンハ墨色と碧る  
事尤めじと房ハニ肖像アヘン画セスあれすよ画面  
自一正義又はも詰像也アラム福島ハノ俠祖キヨ加  
入木クハ邊國ナリモトモ列画モサシテアラムと  
知一

房ハニ墨色アヘン四  
幅四寸四分  
身五分八分  
手三分  
足二分  
頭一寸八分  
身一寸八分

○ うる遊ゆるやくめくらへ  
鷹像を考ねはれ親虎の虎と打半あつて此日  
布くみき極めぬ遊ゆる尤難うて。仰せよ解得  
金瓶梅を虎の半あつて折半めく又は安と定むゆ  
某あつてと屬猪してめ板とま

○ 八士女の抱費あはく破るく高加茂とおぬま平 汗衣  
あづひちうる珠書と抱費の戴り一平 実と辛良  
えびと入居ふと

百十六回

○ えひ汗衣う争戦の争ひ親虎の腰中を放して孝嗣

足行止

○ 路半河西へば時親東と人づくあつての景ひ  
さすあつて是孝嗣の三方をくめん先に現八大角が  
夏引父子と争ひて時腰中の靈玉の争ひ敵一派  
終々生捕とみかう是亦夏引の大才と名と難と云  
おあくへとけとて孝嗣と夏引のめくらの起めある  
おうきとて和洋の争ひとめ事と云ひ一夏引と  
互對あつてのゆくべくもあ

○ 郡おう孝嗣とあ活ヤ一絆と白刃既ス頭ニサ活の胸裏  
胆冷て放す御とあきらめは時リ。や靈狐の脚力あくそ  
就あはう孝嗣の死と見ゆへたる者一人そ一物中

牛序  
理馬主の事  
事主列主事  
不セモヘー

の人と畫く様よほうかわう人の勢とあらゆ  
ア疑ひもる事より先づ王令の室を以て戯うれす  
令と顧み思ふまゝ佛うきへては長年七大主と尋  
主あり信て身と情みて危き由来くぬまつてす  
まあい汝國を師考う御名の事と見のまつて是と  
敬りん彼と故ハソシキ又想まう汝國の令所の事  
御來くめれい極き急急とあうて事のまつてす  
松竹扇のまつてす

執事者を嗣ぎ安房を度セヤ士業正の事とあら  
する半いとぬり又若齋の衣筋と奉嗣あつて

おとむちの枝同ふくめと奉嗣もつての罪とあら  
れおとむと重きるる良臣の程あつていもて松主  
政本始ルあるのまつてのめく清や心類々急う  
あふくしの見くめくめ

河蟹うえのあ意と相田和奈三とめと政本始ル一長  
相治くまもと經るもと傳くまづのめ案廻り  
け政本始ル彼葛のまつてのめく清や心類々急う  
鬼圓小説集の巻と載る某村の瑞石筆マサニ特  
殊の折り板の形とあらうとまづくもれ影とあらう  
妙なる筆マサニ也とまづくもれ政本始ル看守主と

至當モ能志の  
夏目

老瓶ノ先のあやううと物で上野ある茶店又花本橋  
或ハ数百人の死と散るを珍きを驚懸才一の場  
ナリ九尾瓶九星瓶の高瀬ノ例ほく咸伊<sup>ヤシ</sup>文  
通ニ文王膺九尾瓶東夷歸周とあるとけひう瀬アリ

院主

西山<sup>ウツマツ</sup>モぬ後<sup>ノ</sup>手瀬<sup>ハ</sup>感<sup>ハ</sup>是<sup>ミ</sup>ハ秋<sup>ト</sup>大吉<sup>ト</sup>  
望<sup>キ</sup>シメ相<sup>ハ</sup>狸<sup>タヌキ</sup>大角<sup>ト</sup>獲<sup>ハ</sup>福<sup>テ</sup>何<sup>モ</sup>無<sup>ハ</sup>つ<sup>シ</sup>怪<sup>シ</sup>獸<sup>ヲ</sup>  
け<sup>ハ</sup>多<sup>シ</sup>の獣<sup>ハ</sup>ま<sup>ハ</sup>り<sup>ハ</sup>太<sup>シ</sup>と脚<sup>ハ</sup>も<sup>ハ</sup>る改<sup>ハ</sup>良<sup>シ</sup>といふ

老瓶  
月評

竹<sup>タケ</sup>入<sup>ハ</sup>紙<sup>ハ</sup>シ<sup>カ</sup>ー<sup>ハ</sup>接<sup>ム</sup>手<sup>ト</sup>よ<sup>ハ</sup>縫<sup>ハ</sup>りて<sup>ハ</sup>  
身<sup>ハ</sup>の<sup>ハ</sup>口<sup>ハ</sup>歌<sup>ハ</sup>事<sup>ハ</sup>の<sup>ハ</sup>湯<sup>ハ</sup>復<sup>ハ</sup>め<sup>ハ</sup>と<sup>ハ</sup>老<sup>ハ</sup>瓶<sup>ト</sup>  
ソ<sup>ハ</sup>み<sup>ハ</sup>重<sup>ハ</sup>と<sup>ハ</sup>仁<sup>ハ</sup>と<sup>ハ</sup>湯<sup>ハ</sup>も<sup>ハ</sup>や<sup>ハ</sup>と<sup>ハ</sup>口<sup>ハ</sup>清<sup>ハ</sup>  
政<sup>ハ</sup>キ<sup>ハ</sup>海<sup>ハ</sup>と<sup>ハ</sup>茲<sup>ハ</sup>水<sup>ハ</sup>解<sup>カ</sup>リ

百十七回

親<sup>ハ</sup>御<sup>ハ</sup>功<sup>ハ</sup>功<sup>ハ</sup>湯<sup>ハ</sup>熱<sup>ハ</sup>熱<sup>ハ</sup>事<sup>ハ</sup>再<sup>ハ</sup>發<sup>ハ</sup>止<sup>ハ</sup>使<sup>ハ</sup>高<sup>ハ</sup>達<sup>ハ</sup>  
少<sup>シ</sup>待<sup>モ</sup>一<sup>度</sup>と<sup>シ</sup>言<sup>ハ</sup>聖<sup>ハ</sup>事<sup>ハ</sup>多<sup>シ</sup>也<sup>ハ</sup>多<sup>シ</sup>難<sup>ハ</sup>通<sup>ハ</sup>人<sup>ト</sup>と<sup>シ</sup>  
老<sup>ハ</sup>瓶<sup>ハ</sup>伴<sup>ハ</sup>り<sup>シ</sup>と<sup>シ</sup>多<sup>シ</sup>事<sup>ハ</sup>氣<sup>ハ</sup>涼<sup>ハ</sup>和<sup>ハ</sup>人<sup>ト</sup>宣<sup>ハ</sup>同<sup>ハ</sup>  
輕<sup>ハ</sup>も<sup>ハ</sup>多<sup>シ</sup>一<sup>度</sup>院<sup>ハ</sup>主<sup>ハ</sup>

老<sup>ハ</sup>瓶<sup>ハ</sup>相<sup>ハ</sup>事<sup>ハ</sup>と<sup>シ</sup>多<sup>シ</sup>事<sup>ハ</sup>推<sup>ハ</sup>主<sup>ハ</sup>事<sup>ハ</sup>就<sup>ハ</sup>事<sup>ハ</sup>多<sup>シ</sup>也<sup>ハ</sup>

院主

物事よりなつとく  
腹をうてがむ

モルニシニ年半の  
腹裏や津みや  
玉をあさせり

ス巧夫

めも湯をのるまも是も國アーフミとめこす時と說ふ  
説をもして又改め再め湯よ乃のまくめユニヨリム椿狸  
多キ雍モ齋の玉の車鹿モシテマリアヒ玉湯ニ用モ  
シテモシテアモモトモアモテアモ集アツテ 宮主亭モアツ  
大の噬芻ヤ 猪の腹サクアヒ玉と蜜玩せるめ猪大士  
ス計アヒテテアメヘの毛白風佩  
政本ウ鶴山の姓と百萬モ直體と抱持モ此妙  
亨ノ腰改ドリ身の入事モ神角の老狐アシテ  
名アヒ自ゆえはるるそアヒモテ役引者ル  
利害をあんとちかう一筆モ感服サリ仰ギ

○ 政本ウ歌多モ猪山の湯ハ年新  
めの伊勢の竹嶽方彦元モアヒ及不アツヒ大國モ  
政本ウ歌多黒石モ化ヒテ彼殺生石トシテ泥比若  
別アリ考醜モ遺アリ一書ハ 黄石アラセモ房エ記  
ヤアヒヌトムヒテ

○ お江政本ウ歌多の湯多猪山乃昇天ハ初編  
白多モの出現アリ時義寔鉢はく兵えアヒの湯ヒ  
遠く御西モアヒのまくまく湯ヒ乃ヒはく  
ハ湯アリ後赤門院モアヒのまくまくの湯ヒ  
シテアヒのまくまくの湯ヒ

ス巧夫

下部の北橋モア  
モレモアモア

をえがとの辯と

極め昇天の勢ひ目轉ひまゆりと其形勢ひと  
書かざる事の多き又茶店の見事も残らず  
空きやき一きと首尾無事ひてゆく者あり  
ヨリ是も跡づかずさりとてをめく仁寿翁  
湯めぐらし人よからぬあやしむと云へど老翁の  
苦辛と考へれりかにうそと申すと云ふ

にうら山あ西暮の事よりて照野の説あり  
上総あ角山あ西暮の事よりて照野の説あり  
再び津多と名づくもの湯今言ふしめあすと  
アマガミ

新あら翁あら川あら身あら漁村の柳内庵  
てうこの音すり歌りれぬ又之を歌ぬ事ある景毛  
見うめよと縫きするよりて巖内も又三鶴翁  
の事うと歌て笑うをあら

百十八回

萩の上風う角の李鷹の争海ち感す作石書  
頭波う復及りし能くり而ておれに又下露と  
拿組は走人あらも快氣凜とすううのよくも穿るる  
うちめくは波ハ八編下帙の湯菖の社ひともせ  
せ繋ると抜く波と支せとアベーメ

湯菖の對

あら重複す

第一卷

水戸黄門六回の末  
木は最後の段上を  
薛永橋権左衛門と宣す  
金を取らるる元のの  
の福恩と恩をも  
段を下り越を  
かたへまほ度よ  
至て權左衛門と  
水戸橋権左衛門  
ちて医傳と

朝あ上の音葉男へみまと鷹にて上風の金ふとあ  
そがく五十三をあ焉暴俠のあまかき人傳と  
残り見る見みく日ス言と咲く形勢暴俠の  
情態えどく穿得てめぐらをめぐら

五十三太夫多加と軽子の格や焉暴俠ハくとア  
就本多禰子解俠と山田次圓と助け親車  
ウ名主一であたるの母子<sup>日</sup>尤<sup>日</sup>一舟<sup>日</sup>の、  
あん志<sup>日</sup>御攻<sup>日</sup>を師走<sup>日</sup>モ亦<sup>日</sup>の母子<sup>日</sup>了  
御走<sup>日</sup>事<sup>日</sup>のひま<sup>日</sup>あらま<sup>日</sup>ねあま<sup>日</sup>ねあま<sup>日</sup>場合<sup>日</sup>を

2乃木

前事

破落戸を鶴<sup>日</sup>せり四地<sup>日</sup>うちとぞこもとて攻國  
をとおれを計<sup>日</sup>色<sup>日</sup>死め事と云ふ  
是二方の國<sup>日</sup>目<sup>日</sup>を<sup>日</sup>用<sup>日</sup>る<sup>日</sup>と  
攻國をう<sup>日</sup>立<sup>日</sup>草<sup>日</sup>ちと<sup>日</sup>金<sup>日</sup>と<sup>日</sup>強<sup>日</sup>て<sup>日</sup>豪<sup>日</sup>と<sup>日</sup>國<sup>日</sup>を<sup>日</sup>  
立<sup>日</sup>と<sup>日</sup>身<sup>日</sup>ゆ<sup>日</sup>、<sup>日</sup>強<sup>日</sup>て<sup>日</sup>立<sup>日</sup>と<sup>日</sup>俠<sup>日</sup>と<sup>日</sup>補<sup>日</sup>と<sup>日</sup>  
報<sup>日</sup>を<sup>日</sup>寄<sup>日</sup>入<sup>日</sup>船<sup>日</sup>立<sup>日</sup>あ<sup>日</sup>ゆ<sup>日</sup>立<sup>日</sup>あ<sup>日</sup>立<sup>日</sup>と<sup>日</sup>  
病<sup>日</sup>害<sup>日</sup>あ<sup>日</sup>次<sup>日</sup>の生<sup>日</sup>席<sup>日</sup>と<sup>日</sup>休<sup>日</sup>を<sup>日</sup>と<sup>日</sup>ヤ無<sup>日</sup>酒<sup>日</sup>と<sup>日</sup>  
照<sup>日</sup>え<sup>日</sup>う<sup>日</sup>と<sup>日</sup>心<sup>日</sup>は<sup>日</sup>と<sup>日</sup>あ<sup>日</sup>あ<sup>日</sup>旅<sup>日</sup>人<sup>日</sup>と<sup>日</sup>立<sup>日</sup>と<sup>日</sup>  
其後<sup>日</sup>度<sup>日</sup>のあ<sup>日</sup>道<sup>日</sup>と<sup>日</sup>ま<sup>日</sup>い<sup>日</sup>俠<sup>日</sup>縁<sup>日</sup>あ<sup>日</sup>い<sup>日</sup>を<sup>日</sup>教<sup>日</sup>会<sup>日</sup>と<sup>日</sup>  
ゆめ<sup>日</sup>て<sup>日</sup>一種<sup>日</sup>の<sup>日</sup>起<sup>日</sup>て<sup>日</sup>改<sup>日</sup>き<sup>日</sup>と<sup>日</sup>

桂<sup>日</sup>譯<sup>日</sup>と<sup>日</sup>白<sup>日</sup>文<sup>日</sup>

次第も師考の事務のあはとまへ別れ  
さるるをめく又せぬきちけりあるの段末うと淡  
とあひてうきへむるを感ゆ

朱々綿う毛世の助と得事より解きのあは片見  
次第を見え先の便をもて手に縁てほらすの意  
の注進毛へ泥新の手二丸太字車也よと書  
もくらるるよりもぬまあれは時大刀自ら四手裏  
傷ニ堪へぬるを故もと解きのあはるか一とふ  
やく落葉を敵へニキアリ手自らのみく書く  
うちも死派古津屋、廻佩熟度のあはる次國

そ見外は是が周角をめくる極く能の力自  
疑心水解の決説ハ男體ありて又是空也と之  
（め）

本天蓼丸至れり事もすま可と筋脚のあはりて  
事多ひてあつてゆきめりかく信たる  
咽喉がちと深哉の帝皆而て眾の次かと書  
之モトキ一氣の事あつて思ひて靈（も）て用立  
事仰あらむの事に等閑うへ事も廢伏のあは  
由えう諦言うほの事もユ連で重用ヤ一筋の力自  
て空身の様もすへ君へたゞもとづくへ言ふとや

文巧者

應當  
作中連き事と  
蓮やうれい事と  
之

ソノトメ  
ハ國々を近放の事行花井にて宴席を告げ  
る事と接觸あらめとさくらんがはるの御名不教  
会あるべく落まし

○次國を籍る多事の後路便は臣と在りて候  
姉好文とあらわめとおれり金あとおまえま  
あみ金引ひゆとそむかへら自身のゆく詔を  
する事帝の胸中自由自在とソレベ一に後反  
を弘成すとめく

土丈ニ鳴呼若能八もく達すのめ法ひとをひじ

猪小屋より改めち拂方きりあて三歳と殺戮の  
あひとのく一是故也第一のよう、先に周  
麿もこそ燈の火をと大士等、深懺せよと申  
請すと反對といつてからぬて、つけ節を鞠  
とよく立まつて柄の木を破る事アシカの事ある、  
きの情もアリとこそ次國を母の身の持主と  
繰りためく

百十九回

あく評アニ城死に降し乍ら本属をもき  
あきをね、首を正すい三へとあらむと

穩當

あく一段筆をうめ

五言文の列子  
多才多能

醫流は以てかと鳴呼善き事あり其名の文  
字の文ある處へりあるあるといはて問ひる

よあく

穏當

次國をう三体と計て三思く年一寸節主を取  
やうと細々と支二事も出来ぬと今二事  
あつて存す

穏當

次國をう來路のねほれで後報あつ失漏、先手

毛せら生轉の板の時と此處の事述の主音と漏のト  
て巡對と云牛を感佩する作者の自洋と有

穏當

きの再び洋をう及て感嘆をうめまし  
次國をうにう焉爾の來居とおほとえて或悲或  
喜或怒或笑千状の態自ら挙げてゐる事  
ある日移すうめ

洋

穏當

新來焉爾の船をう語く由と文と改憲をうむ官にまち  
たる人と云ふ不俠の情態ありとていづめても  
一又劍を、船と云ふと急ぎて立ちとて叫ぶの病を  
重の二石を載せと呼んで、医薬ありて故の年三十  
洋をうして先のう病をう治すの事と有ると  
跡となりて五百石と云ふ上へ立てる所と

卷之三

百二十回  
親王と呼ぶと  
近づきよしと  
あひてあらぬ  
道あると見え  
天のあたると  
亮元と清てつま  
うるすの有事を  
ゆくと云ふと

百二十一

あくまでも、  
人間の心地と、  
人の心地と亮戸を開いてしまふ  
事もあつて、  
大とちよ陣あとつまきを立てるに對  
ひて、  
又進んで、  
かゝる命令と早速傳わる  
ゆめどりす。  
又おほき事の仕事の功

卷之三

帰寧のひるよしより  
きろせんゆく旅より  
まう故まほめよ  
帰りてかへりとよまほ

卷之六

德文

元巧學

考観、天通は爲を爲すの論争を感服す  
又改名の事の爲め、爲めの風儀ありまつて改名する事  
えと改名する事、め  
五十三を数十人押寄る時、又一事と引かれて、  
急とつゝて見ゆる山を料へやせり。逸時景能  
あくまでものめぐらすをさへ、此時故にあ  
と四馬あるうち、常としてさうめ  
逸時も五十三を足すて至る。教ある事あればと云ふ  
るより、有年をめぐらむめいびねば、逸時も  
古今の法をみる時刻、法をせむむからんとて

穆公の御子  
主父王の御子  
子と連讀する

や。頬。一。あくと駄。荀。年。一。年。も早。一。往。ま。  
又五十三を守。もうあをめ。て。海。一。瞬。の。足。走。ま。  
り。め。そ。う。べ。一。坐。の。心。感。ほ。さ。五。十二。を。先。考。一  
水。済。ら。う。徳。込。足。考。み。一。以。下。一。み。  
詔。書。も。る。多。か。の。事。也。又。雪。と。病。も。一。船。云。の。序。  
料。也。と。往。多。年。也。多。の。場。う。ひ。ひ。考。の。用。が。一。板。舟。  
も。一。ま。ま。の。數。あ。め。お。し。う。の。又。併。石。例。も。め。  
て。口。れ。え。走。み。あ。の。日。駆。す。ま。ゆ。一。も。め。

五十三太陽の軍衣無定綱飯追の司立セテキ

百廿一圖

強きあくと強き

五十三をもと取て助けあへば五十三年報

至

三

羽の守り少く種類とすて上層をうと對面と  
少くもがく外宿深くしてれ御子玉の鳥夜

仰る神助つらうりとめ

船の士卒たぐく跡をみて軍令を定む  
副門に於えくまへおあり靈もて石門を定  
めをすをすし靈の寺侍老猿の神通とあるとて  
争ふと自由とて是也大士の危急せます  
然るうる寺侍の希すがるを役行者

又乃木

伏明神の冥助とよどみとす事にて疑惑水解す  
靈と老猿の脚をすく役の者と明神との冥助を加  
えつけられましむるも威なり此等ゆゑまし  
入る事一空見るゝあへ立て脚をすくわうと起立す  
かて前毛被壓す事ゆゑくあらむとおもひて  
の時坂庄ヶ原湖に伝て此等やう忍ひめうそ  
苦の和の苦引ひあひとる反對の四夜あら  
根とくらべて詔湯の社の一事とせむつらぬ  
風のうさ

官千支賄ひお車を危き而山の辰をめに信ひ爐す

理屋

くわんざまうり  
神智玉思徳  
人かみくわうり

理屋

波多と用ひ又二個の紙を合せて表裏と隼あわせ  
鑿洗を二箇。洗を二人持て各々隼を拂ひ西の  
もの汗をあらへ里の汗を拂ひ

不打火

新來る隼へえくあへ主事と心あひけ玉へ走りが事  
又主嗣も新來る脚より人を追ひて走る氣  
主とあはれりとめりとめりとめりとめりとめりと  
尾をか金帝に次原にけ時例の鷹御もかれてひき  
さすへ是が邪ハ正の陽へ後漢書ニ仁勝山邪  
とすとすとすとすとすとすとすとすとすとすと  
唐の錦綾の夜被の着筋波打三の所、斬りの文作

不打火

桂洋とねぬう

丸め又能て穿得へきとすりの代久例感心と  
次原の機を彦を守りやが鬼穴の涌出アテ西方の鬼  
リ半是玉梓の怨恨と解脱の體と離れて西方降  
ちる起るきん体モアセ怨恨アリげは次原もだま  
迷走アリと看有て聊疑惑とまきり怨恨新道  
アセ次原ハ死するやうあるをうこうのまどり波と岸  
中ヨリ入るをよきよきの波石立チ威体ぢる  
めと是大國目アリ

新來る隼を捕へて樓下を投落て空氣巻  
きとくいとくいとくいとくいとくいとくいとく

之乃也

鉢塗を鉢杖をもるるのを死まふのゆニ感佩す  
又けりと云ふては鉢杖をもる事無く類へてめりへ又  
大金をも幼少から功名へぞ赴きしゝ先を頼多侍  
柳を大金と生捕もる事極めどもへ  
詠歌

縫手をあ械と脇役もて柳と見る事も自ら有  
くいふて

○大金の破れと切捨と功と倉へと英雄とす  
了又功をもと鄉士として破れと再びと切て達  
ノ又金の功と云ふ事も事氣堂にたる俠  
市の情態とあやうとも云ひてくゆく盛の事

頬當

品之第一集  
春立と春立とをて  
新立とお足のひだ  
まと腕の裏筋  
かれと交寄まと  
ひづれ取り一九  
迷惑と

○鉢山翁碑の事軍功と信士へ死投す  
仰首  
仰心感心  
破れ而く首と升と身と母子の事  
昇れ也と  
玄と故學の一端もと仰きて所  
遇八九思前もと佛心の事と助命せんと  
すとくもと不思とすと抱因る事とあると  
既死う既後布佈とあくわく附背毛撫編れて  
自らと如是高き事の事とあくわくすと  
是とて玉持う金持とありくちり老狸と佛墨と  
洋う事とめの事とあくわく是とてハ房の大

桂許と日本

強勵すと佛事と云ふと也。對面す  
故に云ふ事もあつて、必ず云ふ事  
は、佛事と云ふ事である。併し佛事の  
事は、佛事の事である。併し佛事の事  
は、佛事の事である。

○  
証言は、御説教の傳徳と稱へ  
セスガと号ひ、トヤリ年をも和氣に有る  
乙乃老

君主を廢す

百廿二圖

新之井の北通の石門を又今ノ事、神  
佛の宝印つゝも之をも是事かう。評  
三二四

卷之二

館とのえれ姓をもつてのむすて北風と寒やじゆと  
新あら政小室相向源やと遣使四時河源也  
としてあ屬とあ細に送りめ妙文と河原せよ一段  
往くめの仰きと町役をまふと連て亨了の庫  
中はおもろ兄弟の移の候るいふと一役もあまう  
まもむきのもと仰る史あらゆの以西とせよ  
今あら源あるもと河原也  
清澄仁う諱遜辭讓のまゝ名門へあづくと  
のぞく新あら翁氏と叔ひ賀人清年高  
清也

五十三ちももと城の商人と生捕役をりうを接

因みくめ

新あく再び納山と因きセスをとすり假面を  
あらそめ又は假面をもてて御國を守りし事  
とおもむ程にてあへて身をもめくもめく孝嗣の理

言と通して受納やうとめぞよへ

梶やま門の車と車と車と梶門の車と梶城

の梶車と梶多羅と昇りしとあり梶多羅の何等

のうや御車又は百姓の數く字のう

義威をうほほう言ひを以て驚き感嘆せうる

穩當

祐院羅

穢多の毛髪

唐山を不居見

因み類

富士と土峯とも  
雁山並とも主原とも  
の付ふそぞう

高のねづかそぞう

見ゆめくめく又當富士峯の泰らひり有東士峯  
ハ富士の車あるうかわせぬか

文

法燈の私宅をそそぐてちく法燈へ趨くもと突  
老のまもあく一君言ひあは止きの古傳すけ  
てめく禹王湯ゆと所の時三とひ其門とて入る  
ゆとすくめく類くめく

見ゆもの年  
を至る

宮のさるめくすへー君より人のまぶし  
ゆきうりゆきうけ老彦をもやつへもく跡言を  
百廿二面の跡をもよー跡教へ先のなすうち四の政  
の跡教へ一對をめこ是を甚直とひへまう株

三五三

百廿三回

無事内波連づて供人船せう病の傳て車  
やうりゆき年をめく無事は供人船せうの後の  
赴くあらわ供人船せうの事とぞく  
してゑねみく里供人船せうの牛也

え乃木

稳す

足細く  
伝ゆる無事船を客を乗るの角するは長船云  
の又供たぬくに無事船をかじるへ金ちの金の金  
子を多めぬぬめ云

寧々御り大度も早としき時船を迎えず呼也  
くをぬるを早と早かのむ假め考珍室云  
四又も四面のあ居のゆく大ハ大士四又もく等  
漏の集く立とすりあつてゆく感應也又  
四又と通すて天慶より一ほ師のまへば  
まへ汗也

穏當

与四郎り石塔を再令の後、首をもてたまひと

そくは廻属と傳まつて、是時與四郎

湯浅をめこ世の主と與ひて、號する事幼て  
號をうち肝玉賜ひとめられ、又道院より  
代四郎與保と改名され、理言ひともめ事と  
あつて、主とよぶね性をもつてゐる

がるの用心らるるの如きあつて

天王寺宮と助人とそよぎ石塔殿と一夜

歌作や、師本の十常といふ抜身作がある

→ け立事がく立事がく事立事へ、又薦さ

石塔のち中々埋れると、石塔の用事  
をめのむに、又セヤ士多、佛、施りと修業  
火急のあすく、鐵もうち、鑄もうち、もの而て、め東  
國風あり、仁多形跡の目めあり、又うめ、め

癡きぬ

穩きん

百廿四回

大菴の法場の縁、四壁の前をまづ  
火急の事あると、立ち形の方、處事ある事、流石  
忠義の人々の集会の終りて、いづめられ  
て、絶命、自殺するやうと強制されるの

勅文と多と訓補文  
とて天正の比すも  
ほどの従主よやく  
事あらごの文を  
ゆうくよみこと

とて天正のじまく  
ほどの旅主あがむ  
事ゆゑこの文を  
ひりくよみこと

多忙の用事多め  
こ處  
は鳴<sup>通</sup>  
<sup>吼</sup>文と漢文せま  
假名と文も鋸  
きのひよのとあ  
らも

江鷗の如<sup>レ</sup>文と漢文をせめて假名と文にて録  
きまへ小字のやうなあつてのと音くらむありて  
駄あづれへ假名の意と解幼るほど 錄ひゆき  
や巡鳴記の吉仲、蛭住を平げて後の筆より  
漢文強<sup>ク</sup>めぐの文<sup>アラハ</sup>と解も作有<sup>リ</sup>候ゆ  
帰幼多<sup>シ</sup>に筆をひきまくらて後<sup>ハ</sup>の多<sup>シ</sup>宣  
遣<sup>ハシ</sup>のよきまくらへ もれ<sup>カ</sup>まく漢文ハ傳<sup>ハシ</sup>る  
お清<sup>ハシ</sup>れども、遺憾不<sup>ハシ</sup>傳<sup>ハシ</sup>ぬ所<sup>ハシ</sup>對<sup>ハシ</sup>え様<sup>ハシ</sup>

はるかに傳ひあつてもさへ解せぬもの  
事ありてけふの承うる長  
きとまことに縁り  
高晴天すかくわ  
嗟嘆す堪へて感歎する事  
お文くづへ  
仰首の向や凡てあら何

此又代持の時石塔の信を至る御と御  
の事也。是もこそとちくらゝ有りて、少と止て疑心生む  
こそ是モ墓ノ遺物也。其ノ後モ少行ひのう。左  
の事信尤深一め

法場の如きは人跡少  
の處に在りて是れ  
也

法場の形勢五方より遠くありとむ行をす  
ひる筆力自由自在ゆめ其事亨工の傍か  
やしよにとん言ふもう一感觸

地界の精詳を  
存が至りし  
詮解一大考  
従しふもよゆ  
考究の如く  
未トすてまよな  
ト引玉答をもす

李基の邊刀邊弓と有る。能化院の星  
額も先ニ天子機局の化者あり。一夜の石門脚丸の  
半身を亡失し。星額うすく作らす。折者  
の化者あり。書かれて。恩典を四十九。星額の文  
ふと推考れ。額は已て。額は日暮あれ。全く地名  
の觀きの額あり。即ち化して法令と助  
かる能化院と号す。是る依て。法古跡場

昔時よりある。北の化者あり。又九人の  
徒弟ハ寺院をも。北の敷井列。連る。す  
まあり。主こそ是る。又某ある。は星額  
先々李基ゆ。俗の名。像れ。邊弓刀とねまつて  
えりあつて。又思えとねまつて。庵えりし  
僧を施り。のを。衰毛法師。傳用の跡事と  
云ふ。是る。其の事額。是る。當る。法  
化院の先住宝陳和尚も。是る。星額。事も。一二年  
前ある。むろ。松の湯。ことを。ある。而  
又聲說。御庵。仰る。事。一筆。す。是れ

この本考究  
の本改下ぢ  
手を望ム  
モト

評文あり。星部と合て十八人。又三津也  
列地主と云る十體より。ものと神の事  
左法師より。殊々大神は人々の徳行より  
星部と合て十八人。又三津也  
傍の大蕃主をして内裏を守る。ある事より  
一、星部の主とある。又三津也  
云々。穿鑿の主とある。又三津也  
次の如く。漏を施す。又三津也  
想公の名刀といつて。所幸もつて。彼の  
村の鬼刀の鳴應。ひきうち星部と云ふ。

又其傳より  
りとくとう被ひ  
此の生と云ふ  
昇の浮ひるよ  
うるべ

種吉

○  
邊刀ともいへ。一角、出現邊刀と現ハ  
詫やし。赴ち。異ことして。亦乞と遙く對  
面せしや。在數年。何う。想えとて。名  
刀の來居。と。ぬ居。さう。わが。役者。か  
く。隊あく。仰あむ。れね。と。く。鹿角  
石の

名刀船と。退。半。と。草。一。季。基。主。蝶。と。附。て  
相。と。脚。一。時。主。刀。の。底。主。の。ち。も。と。主。モ。一。主。  
名。刀。と。賞。を。も。と。す。一。主。善。主。の。凡。も。り。も。と。  
め。と。又。武。法。の。地。の。主。め。の。も。終。て。降。ま。

種吉

さにかこニテ  
千吉万萬万年  
ほるま自ら登る  
千秋の風と仰む

もと歲と芋と春と  
おと青ス千秋  
万葉歌俗唱へ

えりそをす

部主

九郎半代の事  
詳シ少校已古  
まじき

千秋万春のえりそ  
えりそ  
神刀邊骨の大うゑり後あ産く見ま  
の命第一の功之大功とあるもの假面  
も配玉あまかの事あり感化も又二弓の  
圓鏡五十金と稱思てあり納めて於又  
活用のああたすとある新工ぬ身あつて  
待とし

施引の政りとあり妻を嫁う事があと詳也

すひふうはあゆ  
すみそうねり  
せんぐうと

依て多々黒毛金田の御所ある筆が云壹の法  
歸ニ類ぐるが

通多奇山逸匠寺傳利の結婚されたりと云ふ

合ひ一す

星額ノ大字ノ春深の落多凡人あらゆ  
一赴命と引あらそ口うかく後々例の奇考

め其事ある

政一五三

星額ノ論著て久因サ附通等一書を發三の  
あるいもくとそもそつまよまくい附信乃モ聖

政一五三

政一五三

乙  
巧文

卷之三

和房、知事と富士山の自然を譲り、  
御内閣の自所とづつて、豊富の御用をうながす  
政略の早速の直能をめぐらし、時代は黙り石等の  
白骨附て死生と共もじき、其魂のまゝに、又石等  
の骨と割きし理言をめぐらしめ。

九釋ト換算シ  
詳シ出稿の文

卷之三

○  
太り草薙を主め叶高と大士多とあらそ  
徳の仕事一才  
うるをもく 括句を ぬ

卷之三

太り草薙を主めたる者にて士寧とあつて年  
経の往還一す。不思議に枝同よ。此  
百六十四  
遠近寺の集落強用と幼少成、今恐の先例也。  
也も、何所か、何處か、何處か、何處か、何處か、  
せの奸吏とよも揚ひ。奸吏の集落とぞそ  
緑新坊堅削とぞそく今すの往還也。めし  
老僧來る。謹言も言ふ事ある。官事も  
苦々は元は奸吏多矣。苦渋や常々て仰  
あまき老僧の如きア惜生をも未得い候る。

稿書

松谷堂林故て  
心評を仰ぎ  
予爾

五月十八日記

題目のめ名は自作と云ふ。究徳道達の  
ものるつめを以て。一筆も力ふる能が  
素えあるて極めし。

衰風甚り。信使の便。傍を困とめて。何とす  
恵りて一致せざる處。猶め。猶め。猶め。猶め。  
彼の轍。万葉の面の政。もろ倒金信津  
澤。此活の勢。是れ。歸。之。而。看。客  
に。と。相。と。待。ま。一。ロ。ナ。枯。の。思。ひ。う。  
手取の事。あ。新。長。新。十。春。の

畫。ちく。人。ね。あ。ひ。か。主。清。あ。そ。い。ま。う  
あ。有。え。え。メ。活。り。多。か。半。リ。卦。空。重。復。も  
う。か。変。化。自。生。新。エ。め。基。の。活。か。き。半。凡  
作。の。な。ふ。ま。か。く。者。方。多。年。そ。く。へ。く。る  
長。編。世。教。ひ。あ。う。つ。め。く。感。服。應。後  
の。あ。る。

古。年。脚。評。通。津。の。手。手。書。面。を。そ  
一。の。ひ。る。い。急。キ。活。く。半。え。別。る。漫。字。手。ま  
そ。そ。ス。を。ゆ。ま。と。數。て。ま。ま。し。と。頑。書。の  
古。傳。年。年。刻。の。活。の。活。書。を。そ。く。入。

半殘人

丁酉連正月某一日稿涼城

墨寶

著作堂老先生

三褐不

八太行九舞下快上即詳極合列楮

大奇書

一

豈宜四年未だハセバアた聲の候の上の異解は多きを列挙

百十六 因生解 第二則 云

聖兵佛の嗣子曰法也。傳曰白刃危亡之上不落之三寶も  
無れ。胆冷て松下樹うべき無事り。天狗の助もく免三宝生  
きる。嗣子を又曰人。先ず一人より一箇の人に書く。才キーナ  
ハ無れ。今もうの人物すと車ねても、聲のへーひと墨跡が生カリ  
テ。余の主を聖教にシムトドクモニテ。ソヌミシ御行ナシムヘ  
ヨリ。又セサセ大主を名す。公ト。赤字。公ト。將軍ト。主君ト。左馬  
左馬 ト。主ト。大主ト。左國主ト。ケル種事の外も。之の外へ生キモ  
被ふと紙を移りし。又。又。又。又。又。又。又。

出れ。松子。年少。一月。未だ。未だ。未だ。未だ。  
**福**根。仰。之。手。

卷之三

松谷  
報きゆる事の忠孝と野面先づ國にあらずと云ふ事

電也子はちく竹伏姫神の示現と據りてその時からお風とお城  
まを又毛衣通篠の友をあわせと善きは與まとがくらの心失の罪

今と謂ひて不思議な事だ。おまけに馬鹿の起死。

達する事多し。氣を吐きぬく事嗣々あり。心を告ぐ。徳子。白刃に上り。其勢  
及ぶ胸。身以て胆冷て被す。御方有らまよ。よりひく。皆由言ん。ナニト  
ロケ

胸と手一體を冷めたまんやもてのせ  
故意をうりて考観の先とてすむ

心の爲めにを示すと云ふ事は、何やう語體の事か。又化物の用ひかのとくも世の

つてはひやうにあがやかにとて他に実詳のよし無ゆべと至るを降伏すと

五十二年正月廿二日  
同上  
五十三年正月廿二日  
同上  
五十四年正月廿二日  
同上

アレハビアの異教徒の禍かうを嘗めたり  
おととやうておひひとえふお五十三を賣りの事  
おひて歎上の御子の御心よりおもむきあらわす事

物を勝負つたる事あらずかとて太閤をすすめども  
詮より上風よかでをあて火事の在えりやまうちに太閤をすすめども  
年よりとひ角りてからくにわざと推測えども。みよ衰シテ已と  
あると件のオソヒ機マシンを機械マシンと云ふ事わざと遙ハシマは勢ハシマりと舞ハシマ  
及ハシマれりかとも近ハシマく上风下ハシマあと移ハシマすに至れりかれハ墨國の船ハシマと  
小山雲壤の差ハシマりあり此の機械の事ハシマをも嗣ハシマと刑獄ハシマのれと爲ハシマの  
士卒ハシマニシムナ人ハシマニシムモトヨモ。此三事ハシマ候ハシマれども嗣ハシマと刑獄ハシマのれと爲ハシマの  
扇ハシマを里ハシマへ家ハシマとをうなぎと象ハシマて一色ハシマを拂ハシマふ事ハシマす。思慮ハシマを羅ハシマれ  
見ハシマつてうそハシマてやがてあらじこ又も其向ハシマの間ハシマ洋ハシマの間ハシマ洋ハシマの氣ハシマもする。爰ハシマ  
のあれも布ハシマ井ハシマの異本体ハシマに似ハシマて機械マシンをも因ハシマふ放ハシマ下ハシマてゆきよ。而  
今より車ハシマをも走ハシマりませぬ事ハシマの事ハシマいふべくとてくらむる事ハシマもすうひも  
家ハシマと御ハシマな嗣ハシマとなよ五ハシマ十ハシマをそそびて奴ハシマ役ハシマ候ハシマれども  
車ハシマをねよ。上ハシマへ走ハシマて歸ハシマ腹ハシマの痛ハシマりや。一也ハシマハのみの思慮ハシマの  
薄ハシマす。敵ハシマの船ハシマに母ハシマの娘ハシマを青官ハシマ候ハシマく思ハシマひるされ。寢ハシマ難ハシマい  
心ハシマの用ハシマとこそ無ハシマ事ハシマとさんハシマを古ハシマへ云ハシマ讀ハシマ書ハシマ一百遍ハシマ皆ハシマ可ハシマ通ハシマ其  
事ハシマ也ハシマ實ハシマ事ハシマに釋ハシマ文ハシマと繋ハシマ。毎ハシマ百文ハシマ千恩ハシマせうハシマと云ハシマ外ハシマ者ハシマ官ハシマ  
分ハシマ子ハシマ生ハシマ育ハシマの事ハシマ不ハシマ云ハシマうよ三方ハシマの事ハシマもあらうと。主ハシマ事ハシマのくりひふとを  
家ハシマと云ハシマくはゆハシマ。家中ハシマよられらの事ハシマ難ハシマい今ハシマの一失ハシマくへんせの事ハシマ

百十九回半一期雲霧の内序語と云

謹至説了便丸と嗚呼其の恩教が其のものまことにあつたとす

徳安  
今はまことに人の心に附りてあまく評へたと曰ふゆ  
あまと竹林の書を及するの事は御承り申すが如きで  
あると仰れど其の事は及するの事は御承り申すが如きで

嗚呼善へ膳魚の假名の多民人を石面空不圖大々かづかづ  
走

かく又人の毒と山の毒ともやまの山あらはす  
臍魚と名つるよしむれの因縁丸を又丈丈ニハ  
泥鰌ニシテ皆アラモト

足の魚とて、鰐三鰐ハ多きもの也。石魚、臘魚泥鰌二鰐、上鰐八尾  
鱈、各之から名づけたり。うち中ノ膳魚の假字と鳴ゆ。善く似たり。是深

立身ありて鳴呼の聲具の詩人トモシキは皆たゞか  
其聲を以て奸淫の妻婦トモシキを相應トモシキくもと  
ララウヘ

金瓶梅

季は其の医刀を脅へねまゆ。故に此の星家を免り室あよ。信その御みまく  
一疫する事もあらずとも奇と云へ。星家の御みに従ひて往まつたが  
きとあれば、墨梅と號す。星家のえもと推測す。宿山ともいふ。

卷之三

額は星め。ハ全まつて皆みなう親おやき日ひの氣き。まへ。是は人ひとは行ゆ。往むかしと助たすけ。一  
主ぬしへ。御ご九く院いんと名なづけ。もよ候まわる。一いっは先さき御ご場ば。首くび時ときより毎まい月つき  
望のぞみゆ。化かす。又また九く人の徒徒歩ほり。青あお院いんをと。祀まつる。御ご行ゆ。列�  
走はしる。ままあある。う。一いっを。ままその。小こ物もの。精せい物もの。古古服ふく。そそ方ほう。まま  
又また星め。額は先さき。まま至いた。内うち緑みどり。まま縁えん。後うしろ。遠とお。日ひ。ととわわ。ととわわ。一いっ  
、大おおよ。ああく。う。一いっ。又また。聖文セイモン。文字。序じょ。廣ひろ。ままう。一いっ。不ふ當とう。し。一いっ  
夫ふ。星め。聲こゑ。よ。一いっ身み。ニ。ち。う。へ。う。そ。え。る。後うしろ。丁てい。そ。の。ま。原はら  
せん。の。一いっ幕まく。あ。れ。

又數金泥煙草を併せる一袋で、もとより洋書であることを証する。本題の  
内に於ては、トマト洋書や列國書等、之にて十行程度へと記述  
一節の裏書きがある。即ち九人の名前で、ナキヨリ、ミカエ  
トムコ、アキラ、モツコ、ナホ、太亮など、附言としてある。  
星歌ノ列傳のやうである。また、此の書の題

拙答 ひの取のへ精詳取る事あらず  
ゆきは日生家宝譜一冊ニちりて有とのもと  
ひぬ詳々と被毛剥り主に毛の精詳考被毛剥りの異詳と若抗  
駄嘆柏子の底根の毛す。竹ノ管より毛を取  
也

「宜しく」



至らの事は承り難ゆき感佩する所歟と聞かし矣巧手千  
手をれ極り候事無事とす事まことにあらむとぞ此の事  
若手の如きを思ひ便を以て及ぶ事あるに至る事とぞ  
口ひきの事あつてかうそと聊齋先生の後祀を加へた御歌界  
もひそめ上先年秋本や在の事より一月を隔てて歸くと  
既而よりの事も未だ知らずの宿泊がすのみ其の等甚  
程

丁酉臘月十九日

著者集

墨翟年三十之の大入

此行去



